

プルースト訳・註による『胡麻と百合』の復刊について

吉 田 城

このたびエディション・コンプレックス社から「文学視線」叢書の一冊として、プルーストの訳と註によるジョン・ラスキンの『胡麻と百合』が復刊された。長い間絶版であっただけに、プルースト読者にとっては喜ばしいことである。『失われた時を求めて』の執筆にはいる前、そして『ジャン・サントウイユ』をほぼ放棄したころ、つまり1899年から数年の間、この小説家はイギリスの美術評論家・社会思想家ジョン・ラスキンに傾倒し、その2冊を翻訳した。『アミアンの聖書』(1904)と『胡麻と百合』(1906年)である。

いずれも訳者プルーストの序文は現プレイアド版『反サント＝ブーヴ論』に収録されているので読むことができるが、本文およびおびただしい脚註はいっさい削除されている。それぞれの序文自体、一部は除いて先に雑誌に発表されたものではあるが、本来はあくまでも翻訳単行本の序文として読まれるべき性質のものである。

翻訳そのものについて言えば、プルーストが独力でなしとげたものでないことは書簡などによって明らかである。『アミアンの聖書』の時は母親が逐語訳を行い、プルーストはそれを添削して自分のフランス語に置き換えたのである(パリ国立図書館所蔵の訳文を見ると、このことが証明される)。『胡麻と百合』に関してはイギリスの女流彫刻家マリー・ノードリンガーに多くを負っている。

では『胡麻と百合』の脚註はどのようなことを明らかにしてくれるのか。周知のように『アミアンの聖書』はフランス中世の歴史と建築を扱った書物であったから、プルーストの註もいきおい聖書の引用典或は他のゴシック建築との比較といった考古学的ないし文献的註解が中心となった。けれども『胡麻と百合』は第一部「王者の宝庫」が読書論であり、第二部「女王の庭」が女子教育論であるから、訳註も必然的により「現代的」、もしくはより普遍的な性格を帯びることになる。

特に注目したいのは、この脚註の中でプルーストがラスキンを正面から批判していることである。『アミアンの聖書』の序文と註においても比較的ひかえめであったラスキン批判が、ここに至って尖鋭的な形をとるようになる。それは次のような主な三点にまとめることができる。

まず第一にラスキンは書物を良き友人に、読書を交友にたとえているが、プルーストはこの譬喩を非難する。読書とは孤独の中で自己を掘り下げる行為である以上、会話や社交といった表層的レベルと同列に論じることとはできないと言うのだ。

次にラスキンの偶像崇拜的傾向が指弾されている。この点についてはすでに『アミアンの聖書』序文の中で触れられていたが、ここでは二種類の偶像崇拜が挙げられている。すなわち言葉自体の美しさに眩惑されてしまう態度と、そして芸術的価値と科学的価値を混同してしまう態度である。

第三にプルーストはラスキンが「知的不誠実さ」をもっていると攻撃する。それはラスキンの権威主義的な口調や、「出世」に対する考えに見出されるという。

このように脚註の随所において訳者プルーストはラスキンの表現方法に異を唱えているが、それははず

<書 評>

れも思想の根底、文学創造に深く係わる問題提起である。これらのラスキン批判には一貫して表層の自我に対する深い自我、社交に対する内省、スノビズムに対する芸術創造といったきわめてプルースト的な命題がこめられている。『胡麻と百合』序文で主張したように、プルーストにとって書物とはあくまでも精神生活への契機であって、究極の目的ではなかった。言いかえれば「読む」行為は「書く」行為のために奉仕するべきだということである。

プルーストはラスキンから多くのことを学んだが、この註を執筆していた1905年当時、あらたな創造欲が彼をとらえはじめていた。数年間を捧げた師をあえて批判したのは、それによって自分の道を模索しようとしたからであり、三年後にサント＝ブーヴに対して行うことになる一連の批判とよく似た図式を示している。

この新版に序文を寄せているアントワーヌ・コンパニヨンについて一言。現在はニューヨークのコロンビア大学教授で、新進気鋭のジェネラリストである。著書に『第二の手』(1979)、『我々、ミシェル・ド・モンテーニュ』(1980)、『文学の第三共和国、フローベールからプルーストへ』(1983) (いずれもスイユ社)がある。プルーストの新プレイアッド版編集にも参加している。